No. 937

新春の天皇ご一家

1972年の新春。
やわらかな日射しにつつまれた皇居。
礼宮さま、紀宮さまのやんちゃぶりに目を細められる。
天皇・皇后両陛下。昨年はヨーロッパ7ケ国親善の旅など日本の親善外交に大きな成果をあげられました。
今年3歳をむかえられる紀宮さま。
ママの美智子妃殿下と楽しいお散歩です。
4月には学習院中等科に進学される浩宮さま、若々しい少年ぶりを身につけられました。
礼宮さまは初等科に入学されるとあって喜びもひとしお。
新春のいぶきが満ちあふれた天皇ご一家です。

この道50年

〝土　鈴〟

―栃　木―

栃木県佐野市。毎年暮になると一人の老人が畑のすみに作られた小さな稲荷さんにお参りに来る。にわか作りの祭壇にはローソクの火がともされ、御酒が捧げられ、そして小さな〝土鈴〟が祭られている。
相沢市太良さん（70歳）開運の土鈴を作り続けて50年になる。栃木県は古くから良質の土を産出する。相沢さんはこの良質の土を利用して鈴を作り始めた。
〝土を粘る〟、それは土鈴にかぎらず陶芸すべてにとって出来あがりを左右する重要な要因である。時折、美しい土鈴に目をつけた業者が機械による大量生産をすすめにくる。しかし相沢さんは逆に手作りの良さを教えてかえす。『良い仕上がりは土への暖かい愛情がなくては』と口ぐせのように言う。
父が、むすこが、一つ一つに少しずつ魂をふき込んでいく。
型が出来あがった後の素焼き、それは焼き物の生命でもある。火の加減が土鈴の快よい響に微妙に影響してくる。じっと炎を見つめめる相沢さんの脳裏を土鈴がよぎる。
古希を迎えた相沢老人にとって遅くまでの仕事はこたえるようになった。しかし今ではむすこ夫婦が立派にやってくれる。しかもこの出来栄えは決して見劣りしない。
土鈴作り一筋に50年、相沢さんの技術と精神はそっくり受け継がれていくことだろう。